

帰る物語／留まる物語

——武田泰淳「審判」における国家への想像力——

榊 原 理 智

はじめに

日本の戦後文学が「帰る」ことから始まった」と指摘したのは川村湊である。日本兵はもちろんのこと、『大東亜共栄圏』と呼ばれていた日本の植民地、占領地にすみついていた人たち、訪れていた人たち、そこで生まれ育った人たちも、日本人として「日本」の四つの島（北海道、本州、四国、九州）へ帰還することをまっ先に考えなければならなかったのである。^①この「帰る」ことへの志向は、なんらかの理由で「日本に帰りつかない」、あるいは「帰りつくべき『日本』という場所が失われてしまった」という困惑をもたらし、たしかに敗戦直後の街角には、帰るべき家を失った浮浪者たちや、帰りつかなかったものたちの記憶を胸に生きる復員兵や引揚げ者が溢れていた。

地政学的空間が安定した現在の我々は、帰属意識がすでに固定化されているから、日本人が日本に帰るのだと言われればそれになんの不自然さも感じない。しかし、地政学的空間自体が大きく

変容しているときにはそれは決して自然な行為ではない。川村が周到に言葉を選んで語っているように、すべての引揚げ者にとって「四つの島」は「帰る」べき場所ということばで簡単に表現されるものとは限らなかったであり、彼らは「日本人として」「四つの島」を帰るべき場所としてまず選び取らねばならなかったのである。たとえ生まれ育った場所が満州や北京や平壤であったとしても、自らを「日本」という場所からもともと来たのだと規定しなければならぬ。すなわち、共同体の外延の決定と帰属意識の再構成が、まず何よりも言語上で行われて初めて、移動が「帰還」と呼ばれうるなにかになる。

いわずもがなであるかもしれないが、言語行為と移動の関係を整理するとつまりこういうことである。引揚げはたしかに成田龍一が言うように「大日本帝国の崩壊と新たな世界秩序への移行（＝帝国の再編）の人々の次元での経験^②」であった。だが、その「経験」は二つの位相に分けて考えられねばならない。一つは、物理的な空間移動という実体的位相、もう一つはその移動に対する意

味づけという物語的位置である。実体的位相とはある人間がA地点からB地点に動くということ、それ以上でもなくそれ以下でもない。一方、物語的位置は、移動の出発点Aと到達点Bそれぞれの地点がどのように概念化され、移動全体がどのように意味づけられるかということである。実体的な空間移動にアブリオリな意味はない。帰（属す）るべき共同体は、「帰る」ということばの発話（意味づけ作業）以前には存在せず、移動を「帰る」として言語化・物語化することがパフォーマティブに共同体の外延を決定し、共同性を立ち上げるのである。とするならば、戦後の共同体の再編成を考察するものは誰でも、イデオロギーが発生する第二の位相、すなわち物語的位置において動員された修辭や論理を吟味し、なにが採択され、なにが捨象されたかを追う必要があると思われる。

本論はそうした敗戦後の共同体の外延の決定と帰属意識の再構成を、小説という想像力の装置から読み解く試みの一環である。

「審判」について

「審判」は昭和二十二年四月号の『批評』に発表されている。引揚者自身による体験記や職業作家たちによる引き揚げ体験の小説化などに比べると比較的早期のものである。また、上海という特殊な場所を舞台にしているがゆえに、後に多く出された満州や北鮮地域からの引揚げ体験手記とは相当おもむきを異にしている。また小説としても、上海の日本居留民であった杉という男性による一人称言説の部分と、二郎と呼ばれる元日本兵の手紙の部

分で構成され、上海を去って日本に向かう杉と中国に留まる決意をする二郎という設定に示されるように、帰る物語と留まる物語が抱き合わせになっている点で、興味深いものである。

批評史を概観すれば、自分が殺害した中国人に対する強い贖罪意識を表明した二郎の手紙に中心化し、武田泰淳自身の戦争体験とのつながりを指摘したものがあり、近年では「杉」と「二郎」の抱き合わせ構造に意味を見出すものがある。本論も大雑把に言えば後者の流れに属する。本論では、国家的共同性について語りながら「帰る物語」を生成しようとする過程として杉の語りを読み、自らの贖罪意識を語りながら「留まる物語」を生成していく過程として二郎の手紙を読み、双方が重ねあわされたときに浮上する批評的側面を見ると同時に、杉と二郎の間に共犯的に作り出されてくる新たな国家的共同性の枠組みを検討する。

杉の日常

杉の語りは単線的な物語で構成されてはおらず、移動を意味づける位相はいくつもの物語の可能性が葛藤を繰り広げる場となっている。二郎が決然たる態度表明の手紙を杉に託して留まる物語を完成させたのに対して、杉は自らが納得できるような帰る物語を生成するのに失敗し、上海を去るという実体的移動に「帰る」という意味づけができぬまま「日本」へ向けて出発することになる。

小説の冒頭で杉は、敗戦がもたらした精神的危機の只中にある人間として登場する。我々はその危機が、彼が無意識に依拠して

きた国家的共同性の言説システムの危機として表象されていることにまずは注目すべきだろう。たとえば、彼は「青天白日旗の下に貼り出される新聞やビラ」⁽⁴⁾に脅かされている。今までの権力関係が逆転し、国民党の論理で以前の支配者である日本が攻撃される状況にあつては、主人公杉は弾劾される側に押し込められることはない。杉が軍の協力者であつたのか反戦者であつたのかについて我々は知らされないが、それがたとえどのようなものであつたとしても、この町に新たにあふれ始めた言説システムのなかでは「日本人、ことに上海あたりに居留していた日本人は、もはやあきらかに中国の罪人にひとしい」という位置しか与えられず、むしろ異議をさしはさむ余地はない。もつとも「新聞やビラ」は彼個人を暴力的にどうこうすることを目的に書かれたわけではないし、実際に彼が接する「行きつけのわんたん屋や、住宅区の門番、自転車修繕の子供」は「いつもどおりおだやかに私をむかえてはくれ」ている。ここで「哀れなる異国人」として自分を取り扱っているのは、ほかならぬ杉自身である。であるとすれば、こうした恐怖から逃れるためには、自分の身を上海から引き離すしかないことになるから、「帰る物語」を生成するための、きつかけになりうるものであろう。

外庄によって一括りにされる扱いは、その共同体の構成員間の細かな差異を溶解させる。集中地区へ強制移住後、杉には日本人居留民を「お仲間」と呼ぶ意識が芽生えている。それまで彼らは杉にとって異人種のような存在であつたが、移住そのものが「中国側の命令で」行われた政治的措置なのだから、日本人居留民を

国家的後ろ盾のない運命共同体として認知する以外にないのである。そう考えれば、代書という仕事は杉にふさわしい仕事であつたのかもしれない。彼の扱う文書が「中国側に提出する書類」である以上、杉は日本人という主語を他の居留民に成り代わって駆使しなければならぬ。彼が以前見下していたような「血まなこな気のくばり方」をする商人たちこそ、彼と共通の一人称を持つ人々なのである。この新たに獲得された共同性も、「帰る物語」の萌芽となりうるだろう。居留民たちがこぞつて帰国船に乗り込むとき、一人だけそれを拒む根拠はここには存在しないからである。

しかし、テキストは、かかる帰る物語の萌芽たちに対抗する言説も、主人公のまわりに点在させている。なかでも「友人」とだけ呼ばれる登場人物とのやり取りは、我々読者にテキスト空間における国家的共同性について一つの示唆を与えてくれる。

「これから面白くなるんだ。俺はなんとかもぐり込んで、上海に残るさ。ポルトガルの国籍へはいったつていい」ドイツ系ユダヤ人の女性と同棲しているその友は、ふてぶてしい笑いを浮かべて元氣よく語つた。その徹底した態度には私も好意がもてた。できたら私も外国人の家庭のボーイになつてもいい、このままフランス租界に残らしてもらおうか、と意気込むこともあつた。故国に妻子女の子のない私は、漂泊の民となつてユダヤ人の仲間入りするのがさして不自然とも思われなかつた。「杉さんなら中国人になれる。中国人になつてしまえば心配はいらないのにと、もと使つていたアマさんに言

われたこともあった。しかしなぜか中国人になるのが気がすまなかった。いずれにしても、日本人を廃業するという会話が平気で通用することに、私は底ぬけの自由を感じると共に、底ぬけの不安を感じた。(4)

ここには、共同性を構築するさまざまな要素が雑多に放り込まれている——言語・国籍・外見／身体、伝統／慣習、歴史。示された選択肢を見てみよう。「外国人の家庭のボーイになる」という選択肢は、主人公には日本人居留民の集団から離れた仕事を新たに得るということだが、言語に堪能である必要もないし、おそらく国籍も問われなと思われる。「外国人の家庭」とはフランス租界あたりのヨーロッパ人宅をさしているのであろうから、中国人との接触もなくなる道である。その一方で、「中国人になる」という可能性は、中国人と見分けのつかない身体を持っていることが絶対条件であるから、外見すなわち身体の問題とかわわってくる。しかし、「アマさん」のことは端的に示されるように、主人公の高い言語能力があつて可能な選択肢であるから、同じ身体的条件を持つ日本人居留民すべてに開かれた選択肢ではない。場合によっては、中国人の歴史や伝統習慣を共有しているかのように振舞うことを要求されるであろうから、知識人としての高いリテラシーがあつて初めて可能なことである。

逆に国籍は、少なくとも「友人」の言説においては最優先事項である。ただしこれは上海で生活をつづけていくための便宜上の帰属場所にすぎず、それ以上の意味付与はされていない。つまり、「友人」にとって国籍はその他の要素と切り離して考えられるべ

きものであり、本来が人工的なものである。周到なことにテクストは、この「友人」に「ドイツ系ユダヤ人の女性」と同棲しているという属性を与えている。ユダヤ人は「経験に富む大先輩」としてテクスト中の別の場所にもたびたび登場するが、上海の歴史的事実を補助線にしてみると、この属性は非常に示唆的なものとなる。彼女らはおそらくドイツ籍を剥奪されて無国籍状態にあり、難民救済の世界組織によつて居住権を保障してもらっている状態に在るだろうことがまずは想起される。さらに、この難民救済組織に資金を提供していたのは、アメリカのユダヤ人組織である。つまり、国という単位を超えて、また戦争という事態をも横断するような状態が上海には現出していた。一見能天気語られる「友人」の言説こそ、国を持たないということを、国籍を失うことや歴史・文化を失うことと直結させないような、ユダヤ人の共同性のあり方なのである。

しかし、こうしたことは主人公杉はもとより、時間経過があつたはずの語り手である杉にも見えていない。つまり、杉はこの「友人」からも「大先輩」のユダヤ人からもこの思考を学ばず、彼の混乱は深いままである。上の引用における「友人」の言説は杉の混乱・不自由さを前景化する機能を果たしていると言つてよいだろう。ここから我々は二つのことを読み取ることができる。一つには、杉の共同性をめぐる思考が知的緻密さを欠いているということ。「日本人を廃業する」という大雑把な語り方がそのことをよく表している。したがつて、その先にあるかもしれない新たな共同性に関する言説体系を生み出すまでにはいたっていない。も

う一つは、杉の実際の日常というものに即してみれば、共同性の問題はこうしたさまざまな要素が複雑に絡み合ったものにならざるを得ない、ということ。上海のような「国際都市」で生きていくということは、誰として発話し、誰として他人から認知され、それをどのように受け止めるかという問題が、連続的にしかも日常的に生起するということである。それらの連続的に重層決定された結果として「自分が何者であるか」が存在しており、それ以外には存在していない。はっきりと認識されているわけではないが、杉の混乱は「人が何者であるか」という問の根幹に関わるものなのである。我々は二郎の手紙の分析に移るまえに、この複雑さと混乱をここにしっかりとどめておく必要があるだろう。後に、二郎の状況を対比的に浮かび上がらせてくれるからである。

杉の共同体的思考の混乱・不自由さは、「国土」という要素において露呈される。語り手杉によって特権的に扱われる言説に、新約聖書の「黙示録」がある。「黙示録」の記述を媒介にして、杉は爆弾に破壊された「内地の惨状」を想像し、「黙示録」の描写はそっくりそのまま今の日本にあてはまる」と考える。ほとんど戦火に巻き込まれなかったフランス租界に住む主人公にとって、他者の言説を媒介にすることが、唯一の「国土」への想像力であったことはよくわかることだが、「帰る」物語を生成するという点から言えば不自由この上ない。フィクション的な描写を媒介にしたものであったがゆえに、杉は「内地」を現実感のある、帰るべき場所として考えることができずにいる。

不自由さはそれだけではない。テクストは「黙示録」と「国土破滅」を結びつけてしまった語り手である杉の不自由さをも暴いている。ユダヤ／キリスト教的パラダイムにおいて「世界」という概念は、「国土」という「国」に付属した空間概念とは相容れないものである。放浪するユダヤの民にとっても、キリスト教の教義にとっても、地上に現存する「国」は仮象に過ぎない。ところが、杉はこの「黙示録」の記述を「歴史上何回もくりかえされる」「国土破滅」と等価においている。つまり、教義本来のすじからすると、これは「誤読」なのだが、語り手となった後の杉も主人公杉の「誤読」をまったく対象化しえていないのである。

結局杉は、ユダヤ／キリスト教的パラダイムも、それを必要な部分だけ有効活用した「友人」の言説も、効果的に取り込めなかったことになる。もしそれができていたなら、杉は一人上海で生き続けていくことも可能であったろうし、なによりも「日本へ帰る」物語を作る必要そのものがなくなっていたに違いない。テクストは、杉の共同性への思考の可能性と限界を同時に描きこむことで、「日本へ帰る」という語り方が自然でも決定的でもないようなカオス状態を現出させることに成功しているのである。

二郎の手紙

さて、テクストの前半を占める杉の語りは、居留民の共同体と同化してしまった自分に批判の矛先を向ける。「そして恥ずかしい話ではあるが、最後の審判のあの怖るべき絶滅の焰の下に、案外涼しい空間が残っているとすれば、それを利用してあいもかわ

らずケチな生存をつづけてもいいではないか、とまで考え出すのであった」という一節の自嘲的なトーンは、むしろ杉が受け取った手紙の主、二郎の存在を意識した結果であろう。新たな共同体言説を立ち上げる試行錯誤のすえに、その努力すら放棄してしまった過去の自分への嘲笑は、この後に来る二郎の手紙において語られる、二郎の悲壮な決意を対比的に称揚する結果をもたらす。つまり、なし崩しに同化し、なし崩しに上海を去ってしまった自分を貶める杉の回想語りは、この地に留まった二郎の言説を特権化する構造を持っていることになる。そして、それは語りの現在における杉の価値基準に他ならない。

このことが持つ意味はなんだろうか。二郎は「不幸な青年」であると同時に、称揚されるべき青年であるとすれば、二郎の手紙の中に特権化されるべきどのような言説があるというのか。杉の自嘲的な語り口が、共同性に関する形で現れてきていることを考えれば、称揚されるべき内実は、二郎の共同性への思考にあるはずである。それはどのようなものか。そして、それは杉の思考とどのような対比を形作るのか、そして二郎の生成してゆく留まる物語とどう切り結んでくるのか。

手紙の分析に入るまえに、杉と二郎が共同性をめぐって直接の問答を行う場面を想起しておこう。国の滅亡について議論する杉と杉の友人の熱心さを、二郎はまったく共有しようとしなない。それどころか、国家単位としての日本人の運命を論じる杉の友人に対して、普段おとなしい二郎がめずらしく違和感を明言する。「日本人一人々々の場合ですね。自分々々としてどうなんでしょう

か。」テキストは、この二郎の問いかけが、『国が滅びることはたいしたこっちゃない』という説明さえも、もはや何でもないような、そういう悩み」を秘めたものであることを示しており、二郎にとっては集合的な運命はあくまでも副次的なものに過ぎないことも明確である。

二郎の手紙の前半部分は、たしかにそうしたテキストの伏線をなぞっている。二郎は自分の犯した実際の殺人の体験を語るに際して、「兵士である自分」が犯した殺人と「私個人の殺人」を峻別しており、兵士が「戦場で敵を殺すのは別にとりたてていうほどのことでもありませんまい」という一方で、「完全に自分の意志で、一人対一人で行ったもの」としての殺人であったということにこだわっているからである。それと呼応するように、自分個人が行った殺人の場面を描写する二郎は、被害者である老夫婦を「中国」という共同体と結びつけて規定していない。被害者はあくまで「老夫婦」であって、加害者たる自分も「外国人」「日本人」「兵士」のどれでもなく、「私」として語られている。この二郎の語り方に、共同性の問題が入り込む隙は確かにない。

ところが、その手紙は後半に差し掛かったところで、「一人一人」という問題系を確たる理由づけもなくしに放棄し、共同性の問題を「中国」や「日本」といった国名とともに唐突に出現させることになる。そして二郎に「中国にとどまる日本人」という自己規定をさせて終わるのである。二郎は次のように書く。「私は自分の犯罪の場所にとどまり、私の殺した老人の同胞の顔を見ながら暮したい。」手紙の文脈からいえば、このとき二郎は婚約者鈴

子の父に「それで君は今後どうするつもりか」と尋ねられており、その答えとして発せられた言葉である。鈴子の父の質問はむろん、二郎が他の日本人居留民たちとともに「帰国するの⁽⁵⁾か」という問いを含んでいるのだが、単に居住空間としてどこを選ぶのかに留まる問いではない。いや、そうであったのかもしれないが、二郎はそれ以上の意味において答えている。すなわち、「自分の犯罪の場所」を居住地として選ぶという宣言として。そしてまた、自分は日本人という共同体に帰属するという宣言として。個人で犯した犯罪という規定にこだわっていたはずの二郎の語りは、いつのまにか国という共同体を媒介にせずには成立しないものへと横滑りしてしまっている。

二郎の手紙をめぐる従来の批評ではその贖罪意識に焦点が当てられがちであった。たしかに、二郎に罪の意識が芽生える瞬間は、テクストの中でも印象に残る場所である。しかし、その贖罪意識の質が手紙の書き出しと末尾とで異なっていることには、あまり注意が払われてきた形跡はなく、したがって、個人の贖罪意識が国という共同体を媒介とした自己意識へ凝結してゆく過程でどのようなレトリックが動員されたのかについての考察はあまりないように思われる。⁽⁵⁾ここでは、二郎の手紙を留まる物語の生成であると同時に、帰属するべき共同体の生成プロセスとして分析し、少々煩瑣にはなるがその帰結にいたるレトリックとロジックの道筋をたどってみたい。

「鈴子」

鈴子は二郎の手紙の修辭的な布置の中で、相互に関連するいくつかの重要な機能を担っている。まず第一に、鈴子は手紙の本来あるべき宛先だと考えることができる。杉の語りを読まされている我々読者は、杉が手紙のあて先であることを自明として小説を読み進めざるを得ないが、婚約破棄・帰国直前の失踪というプロットから考えてみると、二郎がその行為の説明責任を負っている相手は杉よりもむしろ鈴子である。残忍な気持ちでなされた一方的な告白、さらに一方的な婚約破棄、挙句の果ての無知の暗闇への放置。二郎が新たに芽生えた自らの贖罪意識に正直に生きる決心をしたとき、その犠牲になっているのは明らかに鈴子なのである。しかし、彼女への手紙は書かれない。二郎が杉に向けて書く手紙において提示されるロジックから排除されるもの。それが「鈴子」という表象の布置である。

第二に、「鈴子」は二郎のトラウマを誘発する触媒である。その意識が芽生えるまでの安穩な二人の生活は、「二人の恋情は燃えさか⁽⁶⁾って」いたと語られているように、ロマンティックな恋愛物語の語彙に満ちている。二郎によれば、二人は「虹口とフランス租界、その間には熱狂した中国民衆がひしめきあっている」という現実世界にいな⁽⁶⁾がら、それとは「別の世界」を構築していたのであり、どこに居住するかというようなことは二義的な問題に過ぎない。(したがって、この時点では「帰る物語」の必然性もないが、むろん「留まる物語」への必然性も胚胎していない。)しかし、この口

マンティックな物語のイメージが寄り添う老夫婦のイメージと重ねられたとき、二郎のトラウマは完全回帰を果たしてしまう。その結果として二郎がたどり着くロジックは、整合性も説得力もまったくないものである。自分が殺人者であることそのものよりも後に老女を残してしまつたということが鈴子の不幸につながる、というロジックは、突拍子もないという感じを与えこそすれ、被害者たる鈴子に対するなんの説得性も持ち得ないのは明白である。触媒として語られているがゆえに、トラウマの治癒というプロセスから排除されるもの。それが「鈴子」という表象のもう一つの布置である。

第三に、「鈴子」は二郎を行為の主体とする装置である。二郎は告白の前に「これでも僕を愛してくれる」とたずね、「愛しすわ」という答えをもらうことを夢想している。二郎にとっては、この告白は二人がつむいできたはずの（鈴子がどのような物語をつむいでいたのかについて、杉の語りで構成されるこのテキストは教えてくれない）恋愛物語を強化するものとなるはずだったのである。ところが恋愛物語は、二郎の期待を無残に裏切つて頓挫してしまつた。修辞として興味深いのは、この恋愛物語の強化を目指して行われた告白が、その予期せぬ頓挫を語られる際に別のものへと読み替えられてしまうことである。

鈴子を失うことは致命的です。しかし失うようにせずにはいられなかつたのです。私は鈴子に正式に婚約を破約するむねを言いました。私には鈴子を失つた悲しみとともに、また自分はそれを取ってののだという痛烈な自覚がありま

した。そして今までにない明確な罪の自覚が生まれているのに気づきました。罪の自覚、たえずこびりつく罪の自覚だけが私の救いなのだとさえ思ひはじめました。（24）

自分にとって致命的な行為、「自分はそれを取ってした」と語ることで、自発的な行為主体としての二郎が言語的に——つまりこの手紙を書く過程における副産物として——立ち上げられていることは明らかだろう。二郎が行為の主体として中心化される代わりに、鈴子は告白されるだけの客体となり、あたかも二郎の行為になんら影響を及ぼしていないかのようにされてしまっている。つまりそうした語り方は恋愛物語の頓挫が実際には鈴子によって引き起こされていることを隠蔽する。ここから看取されるものは、論理的なレベルにおいては端的に矛盾であり、修辞的なレベルにおいては恋愛物語の枠組みの破棄と罪の主体の物語の取得でもある。そしてこれは後にみるように共同性に関する新しい物語でもある。そこから排除されてしまつたもの。それが「鈴子」という表象のさらなる布置である。

「中国」

修辞上の偶発のように生まれた二郎の罪の主体化は、継続されなければならぬ。それに必要なものはなんだったか。次の一節はその必要条件をあらさまに示している。

日本へ帰り、また昔ながらの毎日を送りむかえていれば、再び私は自分の自覚を失つてしまふでしょう。海一つの距離ばかりではありません。自覚をなくさせる日常生活がそこに

待ち受けているからです。私は自分の犯罪の場所にとどまり、私の殺した老人の同胞の顔を見ながら暮らしたい。それはともすれば鈍りがちな自覚を時々刻々めざますに役立つでしょうから。裁きは一回だけではありませんまい。何回でも、たえずあるでしょう。(中略) 自分の罪悪の証拠を毎日つきつけられている生活、それも一つの生活にはちがひありません。そして結局どうなるかわかりません。しかし私のような考えで中国にとどまる日本人が一人ぐらい居てもよいではありませんか。(24)

ここで二郎は、回帰する裁きとしてのトラウマをなんども受ける覚悟を雄弁に語っている。主体的に罪と向き合い、主体的に裁きを引き受ける。しかし、日本はそれが可能な場所ではない。なぜならそこは「自覚をなくさせる日常生活」の場所だからである。罪の意識がつねに覚醒されていくためには、「自分の罪悪の証拠を毎日つきつけられている生活」が必要である…。

日本における安易な日常生活と犯罪の地中国での裁きの生活という対立構図には、一見妥当性があるかのように見える。しかし、ここにいたるまでの過程を検討してきた我々の目には、その構図が不自然になされた接木のように写らざるをえない。たとえば、以前の二郎のように「二人一人」にこだわるのならば、「老人の同胞」という言い方は、自分が殺してしまった代替不可能な「老人」を、その他大勢の「同胞」へ拡散させてしまうことではないのか。同様に、殺人という出来事の一回性にこだわるのであれば、犯罪の地を「中国」へと拡大する操作もその一回性を拡散させて

しまうことではないのか。そのうえ、テキストはすでに、最初のトラウマをもたらしただけものが、「中国」でもなければ「老人の同胞」たる「中国民衆」ですらなく、日本人居留民の鈴子であったことを我々に示している。中国という土地でなければ、中国民衆と対峙していなければ、自分の「裁き」が訪れないという二郎の論理は、彼自身のことばのなかで破綻をきたしている。

もっとも我々にとって論理の破綻そのものが重要なのではない。むしろ重要なのは、ここで新しく作られてくる「中国」の修辭的布置である。二郎が「罪の自覚」の再生産をするためにこの「中国」が欠くべからざる言説装置となっていることに注意しよう。二郎は、これからなんども杉に向けてこの手紙のような「報告」を書くことを述べているが、それらすべてが彼の身の上におこった裁き(罪の自覚)として規定されるためには、「中国」という表象が必要となる。しかも、それは混沌とした「日常生活」と対置されているために、奇妙に現実感覚を欠いた張りぼてになっているのである。本論の始めに述べた、杉にとつての上海という日常を、その横に並べてみるとよい。その空疎は明白である。杉にとつて敗戦後上海での生活は、国をめぐるさまざまな要素がどうしようもなく混沌とした状態で存在するやっかいなものであった。国籍、言語、他者から貼り付けられる自分のアイデンティティ、政治的外圧。ところが二郎の「中国」はこれらすべてのことを捨象し、純粹に観念として肥大化させられた被害者イメージとしての「中国」である。むしろ、それはつねに自分が帰属しない共同体として立ち上げられる必要がある。このような二郎のあ

りようは、固定的に自分をそうした位置に置くことを宣言しているという点において、他者と交わるたびにその言説体系に脅かされる杉のありようの対極にある。

しかし、日常とはそもそももなにか。言語を用いて他者と不斷に交わることを余儀なくされ、そのたびに発話主体としての位置が問われることを必然とするような揺らぎの場ではないのか。発話主体の位置は、発話の前に固定的に存在するのではなく、発話の後にしか立ち上がらない。したがって、これを二郎の修辭の中におさめようとすれば、すべての発話の場面における発話主体を、被発話者と同じ場所には帰属しないなにかとして表象する操作が、事後的に必要となる。一回性の発話状況から思考せず、同じ型の言説パターンを反復し、同じ加害者主体を作り出す。この構造的反復こそ、まさに共同体の本質をめぐる一種の思考停止である。このなかで「中国」は、被害者の老人が帰属する場所であり、加害者としての二郎が決して帰属しない場所として、日常生活に抗して何度でも立ち上げられねばならぬことだろう。となれば、たとえこの言説パターンが二郎をつねに加害者と名付けていたとしても、これは自己充足のためのナルシシズムである。我々は、語り手二郎自身が対象化できないナルシシズムをテキストから読み取り、語り手である杉の価値判断をも超えたところで判断を下す必要がある。つまり、混沌としてはいても、日常の出来事の一回性のなかで脅かされていくようにも、その中で思考していく杉の姿こそを心にとどめなければならぬのではあるまいか。^⑦

「審判」というテキスト空間上で、鈴子というジェンダーを想

起する表象が排除され、そこに被害者としての中国という国を想起する表象が滑り込んできて思考の硬直が示唆されていることの意味を、本論で過剰に云々するつもりはない。こうした修辭的な動きが引き揚げという移動を扱う言説に固有の傾向かどうか、あるいはそうした小説に固有の傾向かどうか等を決定するためには、さらに多くのテキストで同様の修辭に関する分析を行う必要があるだろう。

結びに代えて

最後に、これまでの検証に即して「審判」という小説テキストの末尾を概観しておこう。二郎の手紙は、杉を「友人」として確認するという作業をもつて結ばれている。すなわち、鈴子との生活を捨てて、杉に手紙を書く生活を選んだことがここで確認されているのだといえよう。手紙における言説体系を共有することを要請するホモ・ソーシャルな結びつきの確認であると同時に、帰属する場所を同じくする「同胞」としての杉の確認である。

しかし、杉がこの二郎のラブコールを受け止めたのか否かは、おそらく確信的にないままである。先に述べたように、語り手杉は「日本人居留民」的生活を自ら卑下することによって、二郎の決意に対してなんらかの敬意を表しており、その点で杉は二郎の共同性への硬直した思考を受け入れていると、ひとまずは言える。考えてみれば、杉がさまざまな試行錯誤を重ねても国という思考回路から自由になれず、二郎が「一人一人」というレベルにこだわりのながら、最後の瞬間に「中国にとどまる日本人」と

いう自己／共同体規定に着地してしまったのであるから、その意味でこの二人はお似合いだといえなくはない。

また、語り手杉は、「この青年の不幸について考えることは、ひいては私たちすべてが共有しているある不幸について考えることであるような気がする。少なくとも私個人として、彼の暗い運命はひとごとではないようである。」と語り起こしており、多くの評者が指摘するように、これが二郎の呼びかけと確認に対する杉の直接の応答と思われる部分である。抱き合わせ構造が最初に読者にはつきりと提示されているという点で、二郎のラブコールを受け止めた、とみなすことができなくもない。ただ、その決定的な部分は我々に何も明確な答えをくれない。なにかを「共有している」はずの「私たちすべて」が誰をさすのかはテキスト内を探索すればするほどわからない。日本国籍の日本人なのか、普遍的な人類なのか、また戦後の「内地」の人間なのか、それとも杉のような引揚者なのか？ しかも、その次の文章では、「少なくとも」という謙虚な前置きとともに、二郎のこだわった個人というレベルが顔を出している。この揺れ動く冒頭は、語り手となった杉が二郎の手紙をいまだ受け止めきれないことを示しているとも取れるのである。

武田泰淳は、敗戦という共同体の政治的・外交的崩壊を上海で過ごした経験を、内地での経験とは決定的に異なるものとして後に語っている。すでに多くの評者がさまざまに憶測を重ねてきている武田自身の中国での体験がどのようなものであったのか、我々はむしろ知ることはできないし、「引揚げ」といったような

言葉で外地にいたさまざまな種類の人の実体的な経験と同列に置くこともできないだろう。しかし、我々は第二の物語的位相において武田が造型した小説の言語のなかに入り込み、その言語が織りなす修辭と論理の反目や排除や共犯関係を見てとることはできる。「審判」というテキストは、その修辭と論理が最終的に国というものの想像力——それもジェンダーを巻き込んだ形で——にかかわっているという意味において、敗戦後文学の一つの原点を示しているだろうと思われる。

注(1) 川村湊『戦後文学を問う——その体験と理念——』(岩波新書、一九九五年) 一―二頁を参照。

(2) 成田龍一「『引揚げ』に関する序章」『思想』、二〇〇三年十一月。

(3) 二郎の手紙を中心化する論考は、早く武田泰淳自身の「中国に対する罪悪感を徹底的に批判することから出発した」とする奥野健男の「武田泰淳論——劣等感補償の文学」(『文学界』、昭和二十九年八月)に始まる。告白行為に焦点化した安田武「武田泰淳の文学とひとつの謎——その戦争体験について——」(『文学』、昭和三十六年七月)、重岡徹「武田泰淳」(『山口大学教養部紀要』、昭和四十四年十一月)、「再来」する「殺人のメカニズム」に着目した清原万里「『再来』する殺人——武田泰淳『審判』を中心に——」(『近代文学論集』、二〇〇二年十一月)、二郎の罪の自覚の重要性を論じた白容「武田泰淳『審判』論——人間の自覚を求める心——」(『論究日本文学』、二〇〇〇年五月)もその流れを汲んでいる。兵藤正之助「武田泰淳論——作家としての出発をめぐる——」(『文学』、昭和五十一年七月)、山方富美子「武田泰淳『審判』論——罪の意識を中心に——」(『方位』、一九八九年三月)は罪の意識に焦点を当てているが、杉との比較を行っている点で後者に属するといつてよい。

藤本成男「武田泰淳論——初期作品における無常」(『言語表現研究』、二〇〇一年三月)も杉・二郎の双方に言及しているが、抱き

合わせ構造として論じてはいない。二郎の手紙への応答として杉の語りを詳細に分析しているものには、道園達也「武田泰淳『審判』論」(『高知大國文』、二〇〇三年十二月)、大原祐治の「終わらない裁き、分有される記憶——竹山道雄と武田泰淳」(『近代日本文学』、二〇〇四年五月)、山崎正純「敗戦・後文学論(一)——武田泰淳と上海——」(『百舌鳥國文』、二〇〇三年三月)がある。特に、抱き合わせ構造については大原論文に多くの示唆を得た。

(4) 「審判」のすべての引用は、武田泰淳全集第二巻(筑摩書房、昭和五十三年)より引用している。

(5) 清原万里は二郎の「殺人のメカニズム」の分析のなかで、二郎の犯した殺人の一回性が具体性を失って「殺人として一般化されることと再現可能な経験ともなる」と指摘している。また、清原はその一般化という言語上の作用によって、「それまでは自分とは無縁な存在にすぎなかった人々が、(私の殺した老人の同胞)として、二郎の前に立ち現れて」おり、その「再来」する殺人の予感が、彼に「老人の同胞」たちとの間に関係を切り結ぶことを迫るのである」という優れた指摘を行っている。本論は清原のものに示唆を受け、

こうした一般化の論理を採択する際に、失われたものと得られたものに焦点を当てようとしている。

(6) いくつかの論考は、鈴子の表象に言及している。「鈴子が描かれていない」とする西谷博之「武田泰淳とキリスト教——『審判』『瘦のすえ』をめぐって——」(『日本近代文学』、昭和五十五年十月)、「鈴子は、人間の良心を象徴」とする山方前掲論文のほか、もう少し踏み込んだものに道園前掲論文がある。特に、二郎の「自意識の強さが鈴子の他者性を捨棄してしまっている」という指摘、「二郎は他者としての鈴子との生活ではなく、強い自意識によって自律することを選んだ」という解釈に多くの示唆を受けた。

(7) 山崎前掲論文は二郎の手紙を「遺書」と位置づけ、「だがしかし、やはり依然として生者である他ない二郎には、死者への同化の姿勢を自らに強いることを通じて、殺人行為を犯す以前の二郎自身の社会性を再度獲得していくプロセスのみが与えられたルートなのである」と論じている。これから先の「日常生活」の中で、二郎の手紙の論理は放棄せざるを得ない——保持するのであれば相当な操作を要する——ものだとする本論は、山崎論文から多くの示唆を得ている。

新刊紹介

東郷克美著

『佇立する芥川龍之介』

太宰治・井伏鱒二を中心にしながら、広い視野で近代文学研究を推し進めてきた著者による、待望の芥川論集。前半では「矛盾の前で佇立する」芥川龍之介の姿勢が詳

細に検討され、後半ではその考察が、泉鏡花、室生犀星、そして同時代の文学状況へと開かれていく。

前著『太宰治という物語』において、著者は「機能としての作者」という視点から、「物語」としての「作家太宰治」を究明した。その姿勢は本著でも貫かれ、緊密な作品論にとどまらず、「あらゆる解析の果てに残る作中の作者」に目が向けられている。

本書は、芥川研究の必読書であると同時に、「作者」という概念に新たな可能性を提示した高著である。「作者は死んだといわれて久しいが、私はやはり作者への関心を捨て切れない」(あとがき)と語る著者の姿勢は、読む者に多くの示唆を与え続けるであろう。

(二〇〇六年十二月 双文社出版 四六判 三一五頁 税込二四一五円) [平 浩一]